陶磁器から伝える

QUTOTEN.の余白

光明院との出会い

〈QUTOTEN.〉は 2022年に Entame（エンタメ）社がリリースした京都発祥の陶芸ブランドです。「東福寺塔頭 光明院」を拠点とし、京焼・清水焼窯元『陶葊(とうあん)』の職人と共に、日本文化特有の“美意識”や“侘び寂び”“禅の思想”を取り入れたモノづくりを行っています。国境を越え、まずはアジア圏から、そしてゆくゆくは世界から愛される唯一無二の陶芸ブランドとして活動しています。

東福寺塔頭 光明院

室町初頭の 1391 年（明徳二年）、東福寺の塔頭として金山明昶によって創建される。山門より入ってすぐの、前庭である雲嶺庭には勝負の守護神『摩利支尊天』が鎮座する。

QUTOTEN.

リズムを生み出す句読点。
生活における余白、
ちょっと一休み、そして呼吸。

句読点（くとうてん）には、文章を読みやすくしたり
リズムを生み出す役割があります。高度に情報化し、
目まぐるしいスピードで物事が進んでゆく。
そんな社会において、心休まる時間が擦り減っていませんか。
日本が伝えてきた美学を持って、このせわしない世の中に
『余白』をもたらす存在でありたい。
そんな想いからこの〈QUTOTEN.〉は生まれました。

QUTOTEN.　6つの哲学

一：自然体である。

二：美しく、機能的である。

三：目立つのではなく、溶け込む。

四：すべてを語らず、受け手に委ねる。

五：無駄を取り入れてみる。

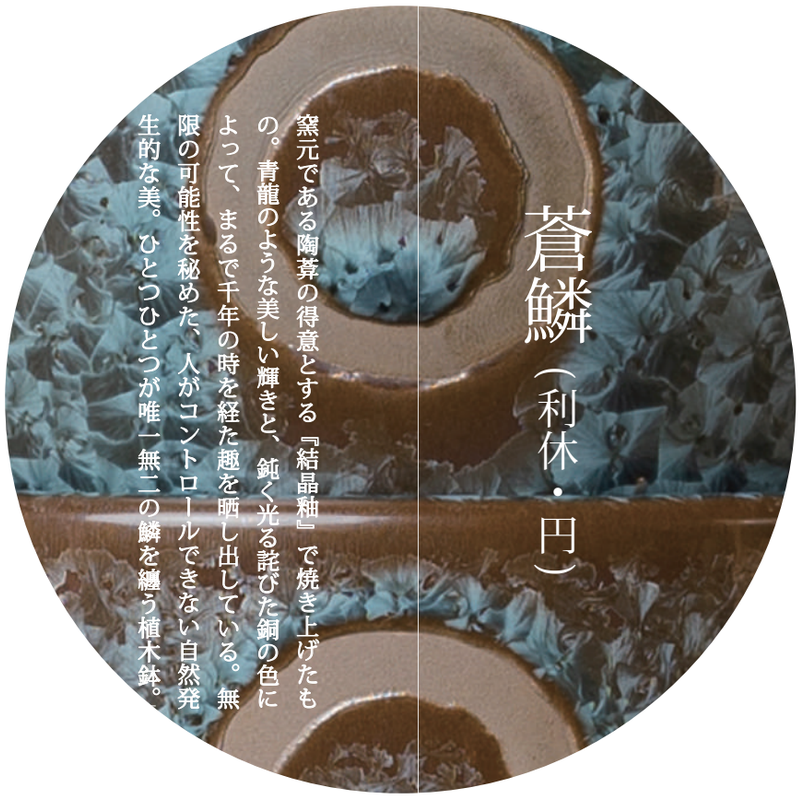
六：まずは自分たちが楽しむ。

利休（りきゅう）

詫び茶の文化を大成させた茶聖 千利休は、
茶の湯にふさわしい抹茶碗を京の職人と共に
生み出したと云われています。
QUTOTEN. のモデル『利休 -RIKYU-』は、
利休形と呼ばれる抹茶碗から着想を得た植木鉢です。
主張しすぎず、自然と生活に溶け込む “侘び寂び” の
存在感を目指しました。

円（まどか）

自然の美しさは、曲線にあると考えています。
水の波紋、川の流れ、木が枝分かれするさま、
貝の螺旋模様…
これらの自然界に潜む曲線は、ただ美しいだけでなく、
長い年月のなかで試され、
洗練されてきた強さを持っています。
そんな曲線に倣って生み出された植木鉢。



蒼鱗（利休・円）

窯元である陶葊の得意とする『結晶釉』で焼き上げたもの。青龍のような美しい輝きと、鈍く光る詫びた銅の色によって、まるで千年の時を経た趣を晒し出している。無限の可能性を秘めた、人がコントロールできない自然発生的な美。ひとつひとつが唯一無二の鱗を纏う植木鉢。

坐（そぞろ）

禅の世界でよく用いられる瓢鮎図より
「丸くすべすべした瓢箪でぬるぬるした鯰を捕まえることかできるか」
という禅問答があるほど。そんな瓢箪の形のユニークさに着目して生み出された植木鉢。
名称は、瓢箪の形が “人が座禅している姿” に似ている事に由来しています。

赫映（かぐや）

竹取物語の一文
哲学のうちのひとつ「全てを語らず受け手に委ねる」

TRADITION is TRANSITION

～伝統とは、絶えず新しいものである～

単に、古いものを尊んで“伝統”と呼ぶのではありません。
時代のニーズを常に掴まえ続け、柔軟に形を変えてきたからこそ、
今まで生き残ってきたのです。
つまり、伝統とは挑戦の変化と歴史です。
これまでの“伝統”をリスペクトしつつ、次世代の価値を究め続けています。
〈QUTOTEN.〉はそんなブランドでありたいと考えています。